［39］

氏　　名	李　暁　辰（い　ひょ　じん）
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学　位　記　番　号	東アジア文化博第 9 号
学位授与の日付	平成 27 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学　位　論　文　題　目	京城帝国大学における近代韓国儒教研究の展開
論　文　審　査　委　員	主　査　教　授　吾　妻　重　二
	副　査　教　授　二階堂　善　弘
	副　査　准教授　篠　原　啓　方

論 文 内 容 の 要 旨

李暁辰（イ・ヒョジン）氏の論文「京城帝国大学における近代韓国儒教研究の展開」は植民地大学たる京城帝国大学において韓国儒教研究がどのように展開したのか、それは韓国の近代的学問の形成とどう関わるのかを考察した研究である。なかでも朝鮮語学・文学講座を担当した高橋亨、支那哲学講座を担当した藤塚鄰および阿部吉雄を中心として、その研究内容や特色、日韓両国の学術界との関係を豊富な資料にもとづき明らかにしている。

内容構成は以下のとおりである。

序　章
第一部　「学制篇」
　第一章　植民地帝国大学と近代学術――文科系を中心に
　第二章　京城帝国大学における朝鮮儒教関連講座の再構成
　第三章　京城帝国大学における韓国儒教研究活動
第二部　「学術篇」
　第一章　高橋亨の韓国儒教研究
　第二章　藤塚鄰の韓国儒教研究
　第三章　阿部吉雄の韓国儒教研究
　第四章　韓国儒教理解の乖離：京城帝国大学の韓国儒教研究と韓国儒教界
　補　章　戦後の歩み――日本における京城帝国大学の韓国学研究の継承
終　章
参考文献
初出一覧
付　録――写真資料

本論文は大きく「学制篇」と「学術篇」の二部に分けられる。まず第一部「学制篇」では京城帝国大学の制度や特徴、人脈、植民地帝国大学として有していた研究上の使命や制約、日本の学界との関係が論じられる。

第一章「植民地帝国大学と近代学術――文科系を中心に」では、京城帝国大学（1926 年設立）および台北帝国大学（1928 年設立）の文科系学部の特性を論じ、植民地大学・国策研究機関として日本内地の帝国大学とは異なり、「朝鮮学」や「南洋学」など新たな研究領域の研究が推進されたことを指摘する。また両帝大の教員が大部分日本から招聘されたこと、教員構成においては、京城帝大は総長服部宇之吉を筆頭とする東京帝国大学系人脈が中心であり、台北帝学は総長幣原坦および文政学部長藤田豊八の人脈による東京・京都帝国大学出身者で成り立っていたことを明らかにする。

第二章「京城帝国大学における朝鮮儒教関連講座の再構成」では、京城帝大における韓国儒教研究の実態を、高橋亨、藤塚鄰、阿部吉雄の３名の教授の活動とその授業カリキュラムを検討することで確認するとともに、服部宇之吉、宇野哲人らに繋がる人脈を論じ、当時の東京帝大における東洋学の学風との関係を考察する。さらに京城帝大で学んだ学生についても調査を行い、卒業後、韓国の学術界で活躍した人物が多数いることを明らかにしている。

第三章「京城帝国大学における韓国儒教研究活動」では、上述した京城帝大の韓国儒教研究者たちが外部とどのような関係をもち、また活動を行ったかを詳細に検討する。すなわち、成均館の後進である「経学院」や「明倫学院」、「朝鮮儒道聯合会」など朝鮮総督府関係の機関・学会での活動、『文教の朝鮮』『青丘学叢』などにおける論文掲載状況、さらには日本の「東方文化学院」や「斯文会」との関係などを跡づけ、京城帝大での研究は単独で行われていたのではなく、日本と韓国の学術の直接・間接的な連関のもとで展開していたと指摘する。

第二部では高橋亨、藤塚鄰、阿部吉雄に焦点を当ててその学問を分析し、日韓両国の研究者の韓国儒教に対する認識の差と相互の影響関係について考察している。

第一章「高橋亨の韓国儒教研究」では、韓国儒教研究に大きな足跡を残した高橋亨の生涯と研究を総合的に検討する。その結果、高橋の韓国儒教理解は時代によって変化していったとし、一、植民地官僚としての立場から韓国儒教を非難し、それを韓国人の「従属性」と「固着性」につなげようとした時期（渡韓後～1920 年代）、二、韓国学研究が充実していくにつれ、高橋自身も韓国文学研究を行う過程でそれまで無視していた韓国伝統文化を再認識するという内面的変化が起こった時期（1930 年代）、三、「皇道儒教」を提唱し、皇民化政策のために韓国儒教を利用しようと試みた時期（1940 代～終戦）に分ける。そして、外在的には日本人官僚としての義務と観念が、内在的には韓国学に対する認識が互いに作用しながら高橋の韓国学は構築されていたとする。

第二章「藤塚鄰の韓国儒教研究」では藤塚鄰の金正喜研究を中心に、その韓国儒教研究と特色を考察している。藤塚の東京帝大博士論文『清朝文化東伝の研究』が韓国と中国における膨大な関連資料を蒐集、駆使して書かれたものであり、金正喜が清朝の考証学者たちと直接の交流をもち、経学上における重要人物であったことを初めて明らかにした画期

的な著作であると評価する。そして、高橋らによって性理学一辺倒とされてきた朝鮮儒教史の展開に、清朝考証学という新たな要素をつけ加える結果をもたらし、当時の韓国側の実学研究者にも大きな刺激を与えたとする。

第三章「阿部吉雄の韓国儒教研究」では李退渓研究によって知られる阿部の認識と限界を考察する。阿部の研究は高橋や藤塚からテーマと方法論を受け継ぐが、大東亜戦争が始まる 1940 年代になると、李退渓を山崎闇斎から元田永孚に至る「尊皇論」を裏付ける存在として描くようになる。しかし戦後の阿部の研究では、そのような発言は見出せず、日韓朱子学交流の中心人物としての李退渓像が代わりに強調されるようになったという。そして、戦前における阿部の韓国儒教研究は、植民地帝国大学の教員として要求された研究とその限界を鮮明に表していると指摘する。

第四章「韓国儒教理解の乖離：京城帝国大学の韓国儒教研究と韓国儒教界」では、韓国儒教をめぐる日本側と韓国側の相互交渉につき、高橋亨と張志淵による「紙上論争」、高橋と藤塚の韓国儒教認識の違い、京城帝大の韓国儒教研究と、当時勃興した「朝鮮学運動」との影響関係につき論じ、高橋や藤塚の研究のもたらした影響や波紋につき考察している。

補章「戦後の歩み――日本における京城帝国大学の韓国学研究の継承」では、戦後、高橋を中心として設立された天理大学の「朝鮮学会」の活動とその特色を論じ、さらに現在、韓国・果川文化院とアメリカ・ハーバード燕京図書館に所蔵される「藤塚コレックション」につき、所蔵の経緯を跡づけ、実際に調査した貴重書籍のいくつかを画像入りで解説している。

終章では、近代期、京城帝大において行われた韓国儒教研究が「皇道儒学」など強い帝国アカデミズムの特徴も含んでいた点は無視できない事実だが、高橋、藤塚、阿部らによって進められ、日韓両国の儒教研究者の協力と衝突の上に成り立った京城帝国大学の韓国儒教研究は、その研究の量と質、方法論、残した資料と影響などの面から、近代韓国儒教研究史の重要な一駒になった、と結論づけている。

なお、「付録――写真資料」には新たに見出された高橋、藤塚、阿部らの貴重な写真を付載している。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

李暁辰氏の論文は京城帝国大学を中心に推進された韓国儒教研究を文化交渉の視点から論じた力作であり、重要な知見を含んでいる。主な成果としては以下の三点があげられる。

第一に、京城帝大における韓国儒教研究の詳細な解明がある。研究を展開させた大学・講座の体制、理念、カリキュラム、人脈を精査するとともに、研究を担った主要人物である高橋亨、藤塚鄰、阿部吉雄の生涯、学問形成、業績について網羅的に調査した結果、多くの新事実を明らかにしている。

第二に、高橋や阿部の業績に関する指摘が重要である。高橋は韓国では「御用学者」というイメージが強く、評価とともに批判も多いが、ここでは事実に即して彼の視点の変化がていねいに跡づけられ、善悪の二項対立を超える篤実な指摘が示されており貴重である。

阿部についても同様である。

第三に、京城帝大における近代学術の展開のあり方に関する考察である。日本から持ち込まれた客観的学問方法としての東洋学は日本による韓国支配、帝国アカデミズムや時局的限界を含みつつも、その量と質、方法論、残した資料と影響などの面から、近代韓国儒教研究史の重要な一駒になったとする結論は、まだ十分に説得的とまではいえないが、これまでの評価に一石を投じたものといえる。

問題点としては、当時の韓国側学者の反応が十分解明されていないこと、ソウルを中心にくり広げられた韓国学についても、より広い目配りが必要と思われることである。後者についていえば、稲葉岩吉や池内宏、小田省吾、末松保和、前間恭作といった歴史学者、河野六郎ら言語学者、村山智順ら民俗学者、三木栄ら医学史研究者などが活躍しており、彼らと韓国側学者を含めた「韓国における近代的韓国学の形成」を構想することも可能であろう。同じ植民地大学として台北帝大との比較研究もいっそう推進されるべきである。しかし、それは本論文でなされたような基礎研究をふまえて初めてなしうることであり、今後の課題というべきものである。本研究は京城帝大をめぐる近代学術の展開と屈折の重要な側面を文化交渉の視点から究明するとともに、また将来への展望を示すという意味をもちうると判断される。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。